

一口メモ

富山大附属病院では「ストーマ外来」を設置し、人工肛門のある患者さんの診療を行っている。専門資格を持った認定看護師が、人工肛門の状態に合ったケアやアドバイスを行う。他の医療機関で手術を行った患者さんにも受診できる。人工肛門だけでなく、人工膀胱（ぼうこう）など尿路系ストーマに関するトラブルや相談にも応じている。

知りたい！
治療の最前線

◇36

直腸がん手術

肛門とともに、便の排せつに密接にかかわる直腸・直腸がんの手術では、がん組織をすべて切除して病気を完治させるだけでなく、手術後のQOL（生活の質）を維持するためにも肛門機能を温存させることが求められます。肛門の温存ができる条件や、近年急速に普及しているロボット手術について解説します。

ロボットで確実に切除



北條 荘三
富山大附属病院
第2外科診療講師

肛門機能も温存

直腸がんの手術では、がん細胞とその周囲の正常な部分を含めて広く切除します。がん細胞は、病巣から2センチ以上

離れた肛門側の直腸まで広がるのがほとんどないため、がん細胞から2センチを目安に切除します。

約1割人工肛門必要

肛門側の直腸をある程度残すことができれば、肛門近くの腸と腸をつなぎ合わせま

締める筋肉「肛門括約筋」を部分的に切除し、腸と肛門をつなぎ合わせます。

高い難易度

このように肛門に近い直腸がんは以前であれば、人工肛門（ストーマ）をつくるのが多かったのですが、がん組織を安全に切除し、腸をつなぎ合わせられる腹腔鏡

手術の普及によって、肛門を温存できるようになりました。ただし、がん細胞が肛門の

高い難易度

直腸と肛門はおなかから見ると、狭くて深い骨盤内にあるため、深くは骨盤の中には重要な血管や排尿、排便機能を調節する自律神経が複

さらに近い場所にできた場合、直腸と一緒に肛門括約筋を切除してしまつたため、人工肛門をつくる「直腸切断術」が必要となります。永久的な人工肛門が必要となる患者さん

難に通っており、直腸がんの手術は、大腸がんの手術の中でも難易度が高いとされています。そこで登場してきたのが、狭い骨盤内でも手術操作をより精密に行える手術支援ロボットです。患者さんの体に開けた小さな穴からカメラと鉗子の付いたロボットアームを挿入し、手術を行います。骨盤の奥深くまでアームを挿入して鉗子を操ることができ

ることから、神経や肛門の機能を損なうことなく、確実にがん組織を切除できると期待されています。

当院では2018年6月、県内で最も早く、直腸がんへのロボット手術を導入して以降、肛門に近い直腸がんのほぼ全例にロボット手術を取り入れています。ロボットを用いることで、従来は肛門周囲の筋肉を切除し、人工肛門をつくる必要があった一部のケースにも、肛門温存術を取り入れることができるようになりました。

図 直腸切断術(肛門が残らない)

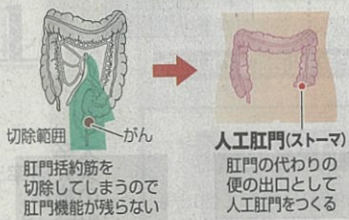
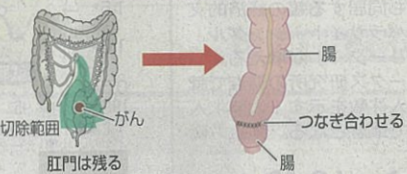


図 低位前方切除術(肛門温存手術)



直腸がんのロボット手術は、全国で年間4千件以上行われています。1年間の直腸がん手術の2割弱に当たりません。従来の腹腔鏡手術をはるかにしのぎ勢いであり、今後の直腸がん手術はロボット手術が主流になるとみられています。

◇ 次回は28日に掲載します。